

---

# ココロ・プログラム

断歩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「コード・プログラム

【Zコード】

Z3719BA

【作者名】

断歩

【あらすじ】

進んだ科学技術は、我が身を滅ぼす。

その言葉の通りに、

人類は凶悪なウイルスを開発した。

けれど、実験の失敗でウイルスは外に漏れだしてしまった。

その結果、人類のほとんどは死滅した。

一人の天才科学者は、孤独の中に何を想うのか？

未来に残すべきものは、DNAだけなのか？

奇跡的な出来映えのロボットは、考える。

ココロとは何か。

一人が辛いのは、何故なのか。

今、ロボットが奇跡を起こす。

## 奇跡の誕生

ここには、都市があつた。

進み過ぎた科学は自らを滅ぼす。  
まさに、その通りだつた。

そこは最新科学技術が作り出した新素材によつて、その都市のほとんどは銀色に染まつていた。

ロボットは当たり前で、家事炊事をするロボット、掃除をするロボット、介護をするロボットなどたくさんのロボットがそこにはいる。しかし、人間または人間にもつとも近いロボットは創り出せなかつた。

ある日、人々は凶悪なウイルスを生み出した。そして、問題が起きた。

ウイルスが漏れ出したのだ。

漏れ出したウイルスは世界中に広がり、地球の人類のほとんど、生物のほとんどが死滅した。

ある滅びた都市に、一人の科学者夫妻はウイルスの脅威から逃れ、生き残つている。

彼らは遺伝子操作によつて天才の我が子を創りだした。一人の子は、夫妻にとても愛され、大切に育てられていた。

しかし、彼が十六歳になるときに、彼の両親である科学者夫妻は、病によつて亡くなり、彼は孤独になつた。

滅びて、苔やツタなどに覆われた都市の中で一人。高台から見渡す限り緑が生い茂る、この世界を一人で生きていくことになつた。

このとき彼は孤独の痛みを、孤独である苦しみを知つた。

そして、彼は自分のそばにいてくれるロボットを創り始めた。

十数年後、孤独な科学者はロボットを創った。

システムは完璧、見た目は人間の少女と見分けがつかない。あえて出来映えを言うなら、奇跡。

「よし、あとはロボットを起動するだけだ。」

ボクはロボットの起動スイッチを慎重に押した。バチバチという音とともに、火花と青白い閃光が出る。しばらくすると、火花と青白い閃光は治まつた。

「成功したのかな？」

ボクはロボットの傍に近よる。

『システムの正常な起動を確認シマシタ』

ロボットは目を閉じたまま囁く。

ボクがホツと安堵の息を漏らしていると、ロボットはゆっくりと目を開いた。

「初めてまして、ボクは君を創った、博士だよ。」

ボクは嬉しくてたまらなかつた。

『ハ、カ、セ？』

このロボットは人のように記憶を持ち、自ら学習をし、考えるロボットだ。

しかし、まだ起動したばかりで、思考があまり働いていないようだつた。

『ハカセ、ナゼ泣いているのデスカ？』

ロボットは首をかしげていた。ボクは彼女に言われるまで、涙を流していることに気が付かなかつた。

「大丈夫だよ。それよりも君の名前はもう決まつていいんだ。」

『ナ、マ、エ？』

「そう、名前。君の名前はリオ。」

ボクはロボットに名前を付ける。なにせ唯一の家族なんだから。

『リ、オ？……ワタシの、ナマエ？』

リオはまだ理解できていなかつたが、ボクはリオを抱きしめ、彼女の耳元で囁いた。『そう、君の名前はリオだよ。』

『リオ。ワタシの、名前。』

ただ、ただ嬉しくて……ボクは彼女を抱きしめた。だつて

ボクは孤独ではなくなったのだから。

博士の歌（前書き）

感想をお願いします

## 博士の歌

孤独な科学者はロボットを創つた。

システムは完ぺき、見た目は人間の少女と見分けがつかない。  
あえて出来映えを言うなら、奇跡。

だが、まだ完成していない。

一つだけできない。

それはココロという

### プログラム

奇跡のロボット、リオが誕生してから一ヶ月が過ぎた。  
目覚まし時計のアラームが聞こえる。

まだ眠いのでボクは腕だけで、乱暴にアラームを止める。  
そして、また眠りについた。

しばらくすると、誰かがボクの体を揺さぶつて「アラームが付いた。

『博士、起きてクダサイ。』

ああ、リオが起こしに来てくれたのか。

「リオ…もう少しだけ寝させて…」

ボクはもう一度眠ろうとする。

『コーヒーが冷めマスよ。』とリオは続けて言った。

コーヒーを淹れてくれたのか。せっかく淹れてくれたのだから、飲まないとリオに申し訳ないな。

「おはよう、リオ。」

ボクは眼鏡をかけ、立ち上がった。

『おはようゴザイマス、博士。コーヒーを持って来マスね』

リオはトテトテと小走りで、ボクの机に置いてあるコーヒーを取りに行つた。

「ふあ～、よく寝た。」

『博士、どうぞ。』

ボクが背伸びをしていると、リオがお盆にのせたコーヒーを差し出してくれた。

「ありがとう。 いただくな。」

うつ、少しづるくなってしまっているな。 やはり、きちんと起きるべきだつた。

でも、リオは「コーヒーを淹れるのが上手だな。……まあ、そういうデータが入っているからか。

「うん、おいしいよ。」

『ありがとうゴザイマス。 アノ、博士。 机の上に置いてあるのは、何デスカ?』

突然リオが指さす所には、何冊か冊子が重ねて置いてあつた。

「あれには、歌が書いてあるんだ。」

『ウ、タ?』

「そう、歌。 昨日の夜にやつと完成したんだ。」

『博士が、作ったウタ?』

「そうだよ。 それじゃあ、隣の部屋で練習を始めよつか?』

『ハイ、博士。』

そして、今日からリオに歌を教え始めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3719ba/>

---

ココロ・プログラム

2012年1月10日22時48分発行